色彩教材研究会通信　No.424　2025.1.9

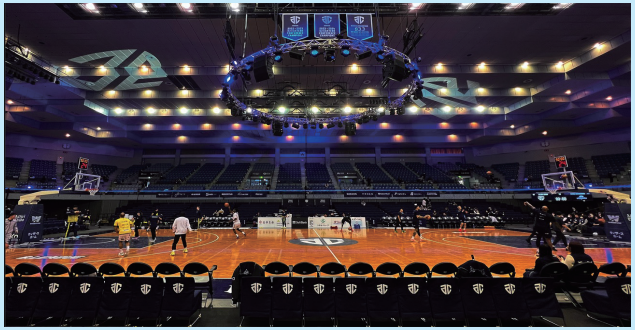
発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

●2025 年はメルマガ執筆から

今週 1/6(月) から仕事始めでした。みなさまはいかがお過ごしでしょうか。こちらは関東支部のメルマガ原稿を書きました。

日本のプロバスケットボールリーグ（B リーグ）の B2 に所属する「アルティーリ千葉」のチームカラーについての内容になります。私自身、「アルティーリ千葉」に出会う前は、休日も仕事のことばかり考えてしまい、on/off のメリハリがつきませんでしたが、息子が通う小学校で配布された「無料招待」のフライヤーを手に、ホームコートのある千葉ポートアリーナに行ったところ、試合だけでなく、演出、店舗デザイン、ブランディングまで全てにおいて感動し、すっかりファンになりました。同時に自身の on/off のメリハリもつけられるようになったのは言うまでもありません。

（吉澤陽介　主査より：025）



源氏物語の色 -56「夢浮橋」

浮舟とおぼしき女性の噂を伝え聞いた薫は二十八歳の夏、横川の僧都のもとを訪ね、小野の僧都の妹尼の所に居る浮舟についてのあらましを聞いた。

小野の山里では浮舟が、青葉が深く繁った山に向かって、遣水の螢を昔が偲ばれる慰めであると眺めていた。妹尼達も縁の端に出て、はるか遠くの山あいを下山する薫一行の灯す松明のたくさんの光が揺れ動くのをぼんやりと見ている。この帖の中で最も情景の彩りを感じる場面である。

後日、浮舟の弟の小君（こぎみ）が僧都と薫からの手紙を託されて浮舟を訪ねる。その訪問で、母である中将の君を思い起し涙ぐむ浮舟であったが、小君との対面は厳しく拒む。読もうともしない浮舟の前に、妹尼は、薫の文を広げた。すばらしい香のしみた紙に、見事な筆跡である。浮舟は、薫からの手紙をも、人違いかもしれないと言って返す。姉に会えずむなしい気持ちのまま帰京した小君の話を聞いた薫は、浮舟の心をはかりかねた。もしや誰か男性が隠し据えようとしているのであろうかとも疑うのであった。

ここで「源氏物語」全五十四帖の長い物語は幕を閉じる。

（平山和香子）

「理想の色に巡り会える　日本の伝統色」監修協力を終えて -1

図鑑シリーズの第４弾で監修協力も四度目になります。実際には色彩の専門知識に加え、数多の文献と照らし合わせる事によって内容の正否を計り、真実を伝える事を重要な使命としています。従って、私達は個々にすべての箇所を校了まで幾度も検討します。例えば、本来「びろうど」は、添毛織物の名称の一つで、ポルトガル語 (1532 年頃) からきています。生地が光沢ある白鳥の翼に似ていることから「天鵞絨（てんがじゅう）」と当て字が生まれました。色名を当て字とフリガナにするか「ひらがな」のみにするか決めかねていた所「紺屋茶染口傳書」の染法に「びろうど」という染色名 (1666 年) を見つけ決定した次第です。

写真も説明に見合う画像を探し、更により見栄えするものであるか厳選しています。

ところで、内容の構成は編集者が担います。つまり、本は彼らの感性が現れます。私達はその感性を損なうことなく、文体や言葉の表現を推敲することが役割だと思っています。見解の違いで、ある事柄が交錯し結論に至るのに時間を要した箇所も多々あります。その議論の末の実りが皆様のお目に留まることを願っています。

（三本由美子）